

「暴力と形而上学」における空間の問題——デリダによるレヴィナス批判の射程の画定
早稲田大学文学研究科 表象・メディア論コース 小林嶺

ジャック・デリダ「暴力と形而上学」（1967）は、エマニュエル・レヴィナスに関するまとまった研究としてはもっとも早い時期のものであり、かつその影響は、レヴィナス研究にとって今日まで決定的なものであり続け、またレヴィナス自身の思想的変遷に対しても大きな変化をもたらしたとされる。しかしながら、そのデリダ論文のインパクトの強さからか、両者のあいだに横たわる思考の交錯とその諸問題とが、いささか簡略化されたかたちで受け取られていることもまた事実である。たとえば、レヴィナスの思想とはまったき他者への倫理であり、デリダはその他者の純粋性を批判した、といった要約がそれである。こうした要約は決して間違いではない。確かにレヴィナスの哲学は「顔の倫理」とでもいべき他者論としての側面が強い。間違いではないが、このような大枠の視座からでは捉えられないような緊張関係が、「暴力と形而上学」のなかには孕まれている。たとえば、レヴィナスは『全体性と無限』第4部Cにおいて、「他者は終着点ではない」としたうえで、さらなる超越の次元を呈示しようと試みている。レヴィナスが一貫して批判する存在論は、ここでは、まったき他者としての息子を懐胎するための多産性の次元の条件になっているときえ言える。それゆえ、デリダの批判がたんにレヴィナスにおける「他者」の純粋性に対してのみ向けられるものであれば、この批判は正確にはすれ違っている。もちろんデリダ自身、このような単純な構造からレヴィナスを批判しているわけではない。本発表においては、「暴力と形而上学」のテキストを、「空間」をめぐる議論に沿って読解することで、両者のすれ違いがどのような構造をなしているのか、あるいはそのようなすれ違いを経てなお、いかなる意味でデリダの批判が有効な射程を有しているのかといった問題を検討する。まったき他者の（非-）現前とその汚染という構図に還元されることのない両者の議論の絡み合いを解きほぐすことは、よく指摘されるデリダからレヴィナスへの影響のみならず、レヴィナスからデリダへの影響を考えるうえでも欠かせない作業であるように思われる。また、こうした分析を通して、両者のあいだの緊張関係が、『全体性と無限』における「エロスの現象学」および一群のエロスのモチーフにおいてもっとも先鋭化しているという点を示すことが、本発表のもうひとつの目的である。

【参考文献】

Jacques Derrida, *L'écriture et la différence*, édition du seuil, 1967. (合田正人訳『エクリチュールと差異』法政大学出版, 2013年)

Emmanuel Lévinas, *Totalité et infini: essai sur l'extériorité*, (1961), Kluwer Academic, Le Livre de poche, édition 13, 2010. (熊野純彦訳『全体性と無限 上・下』岩波書店, 2005-2006年)